

## 第 18 回東亜同文書院記念基金会授賞式 記念賞推薦のことば・受賞挨拶

平成 24 年 1 月 24 日、霞ヶ関コモンゲート 37 階の霞山会館において、第 18 回東亜同文書院記念基金会授賞式が行われました。今回は愛知大学名誉教授藤田佳久氏が功労賞を、愛知大学非常勤講師の武井義和氏が奨励賞を受賞されました。

小崎昌業氏、中島寛司氏による推薦のことばと、藤田佳久氏、武井義和氏の受賞の挨拶を紹介させていただきます。

### <推薦の辞>

#### 東亜同文書院基金功労賞 藤田佳久殿

#### 「オープン・リサーチ・センター」プロジェクトと新聞寄稿によって 書院一代記を描き上げた藤田先生の御努力

東亜同文書院大学 42 期生 小崎 昌業

上の趣旨により藤田佳久先生を記念賞受賞の対象者として推薦致します。

実は先生は 1993 年に一度記念賞を受領しておられますが、今回更に功労賞をお送りしたいと思います。それは何故かと申しますと、2006 年から始まった文科省の学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター」プロジェクトが 5 年間の実施期間を終えまして、その間全国を行脚して展示会・講演会等により東亜同文書院大学行事を行なったこと、更に 2011 年 10 月 3 日から 12 月 28 日にかけて「東亜同文書院の群像 日中に懸ける」を中日新聞等三紙の夕刊に 60 回先生が掲載されたことによるものです。

東亜同文書院記念基金会が 1991 年に設立されたあと、1993 年に書院記念センターが開設され、内外からの多くの見学者が来られ、好評を博しておりますが、2006 年文科省の「オープン・リサーチ・センター整備事業」に選定されたことにより、各種シンポジウム、講演会・研究会の開催をはじめ、書院の性格やその中国研究、愛大の継承的開設に関する研究も行なうことに

なりました。

このオープン・リサーチ・センター事業として、2006 年に横浜、2007 年に東京、2008 年に福岡、2009 年にシカゴと神戸、2010 年に京都、米沢、名古屋でそれぞれ展示会と講演会を行ないましたが、特にシカゴではアジア学界を集めシェラトン・ホテル及びシカゴ大学で 3 月 26 日～29 日に実施されたことが記憶に残ります。

藤田佳久先生は、昨年三月まで愛知大学文学部教授(理学博士)、東亜同文書院記念センター長を務め、書院生の中国調査旅行記録を研究、現在は同大名誉教授であります先生の 68 頁に及ぶ研究業績目録の中から書院生の中国大旅行関係事項をとり上げてみますと 103 点の多数に及びますが、そのうち書籍として刊行されたものは「中国大旅行調査の研究」「中国との出会い」など 7 冊に及び、先生お独りの力により、戦前残した書院生の大いなる足跡が、今日の内外社会に生かされていることを知るのであります。

次に、先生は昨年末 3 カ月、60 回にわたり、日中に懸ける東亜同文書院の群像を掲載され

ましたが、その内容たるや、実に豊富多岐にして、書院の実像を生き生きと伝えるものであります。その概要の一端を述べますと以下の通りです。

今から百年前、辛亥革命の実体を目撃した日本人(東亜同文書院)学生がいた。書院は 1890 年に設立された日清貿易研究所を発展させ、1901 年上海に開設された経営母体は東亜同文会、会長は近衛篤磨。初代院長は根津一。学生は各府県から入学させ、中国語の徹底習得と現地調査大旅行を促した。

なかでも山田良政、純三郎兄弟は孫文を支え、中国の自主独立と日中協力に全力を注ぎ、これに賛同する多くの日本人がいた。

#### 〈荒尾 精〉

荒尾精は陸士を卒業、1886 年清国へ渡り、岸田吟香の漢口「楽善堂」を頼り、日本の若者を集め情報収集に努めた。1889 年荒尾は帰国し、翌年上海に「日清貿易研究所」を設立し、学生 150 人を渡航させ、3 年後、90 人弱の卒業生を出した。しかし、当初から財政難に直面した学校では、根津一が荒尾の代理所長を努め、清国に関する膨大な情報を整理し、1892 年に全 3 巻の「清国通商総覧」を刊行した。

荒尾は、京都で「対清意見」や「対清弁妄」を著したあと、台湾貿易のため台北に渡り、96 年、コレラのため 38 才で亡くなった。

#### 〈近衛篤磨〉

近衛篤磨は 1885 年から 90 年にかけて独逸に留学し、帰国後貴族院議長となり、日本の近代化をすすめる開明的指導者として、東亜教育のネットワークを推進することになった。日清戦争後、篤磨が設立した支那保全論に基づく同文会と、康有為と梁啓超を入会させ清国問題を積極的に議論しようとした東亜会を合併し、98 年に東亜同文会が誕生した。また 1899 年、清国留学生受入れ校として東京同文書院を設置した。篤磨が会長となった東亜同文会の綱領は、一、支那の保全、二、支那及び朝鮮の改善助成その他を定めた。99 年欧米視察旅行の帰途、

中国で改革派の劉坤一に会い、南京に学校創立を申し入れ、快諾を得、また張之洞とも会い、教育事業について意見を交わした。南京同文書院が 1900 年に設置されたが、義和団の乱を避け、翌年上海に東亜同文書院(高昌廟桂墅里校舍)が開学され、前者の学生は後者に転入した。

根津は、日清戦争で九死に一生の過酷な体験をしたあと 1895 年から京都若王子に隠棲し、参禪と鎮魂の日々を過していたが、1900 年篤磨から呼び出された。書院院長として全国遊説、各府県の公費生及び私費生の確保、全員の東京招集と華族会館での招見式、大阪、神戸等の見学を行ない、アジア最大の国際都市・上海に向った。この入学時の行事は書院閉校時まで続く。

#### 〈国際都市・上海〉

書院はその開学目的を「興学要旨」と「立教綱領」の 2 編で示し、学科は政治科と商務科、3 学年制で、語学、実学を徹底教育した。更に当初、根岸佶教授の指導により新入生の修学旅行から「清国商業慣習及金融事情」を出版して好評を得、1907 年には全 12 巻の「支那経済全書」を商業実務のエンサイクロペディアとして出版した。第二革命の戦火により、1913 年桂墅里校舍は炎上し、書院は赫司克而路の建物を借用することになり、ここで新設された「農工科」は 22 年に姿を消す。1917 年書院は徐家匯虹橋路に新キャンパスを造営することになり、翌年「支那研究部」が、また、20 年から「中華学生部」が新設される。根津院長は生涯誠心誠意、書院発展のために努め 20 年に書院創立 20 周年記念式と根津院長の還暦祝賀会が開かれた。22 年東亜同文会は法人化され、22 年、根津は院長を辞任した。

#### 〈大調査旅行〉

ビジネススクールとして誕生した東亜同文書院の教育には重点が二つあった。一つは生産者と直接取引が出来るようにカリキュラムに語学を多く設け、もう一つは中国の実態把握のため

各地を徒歩で旅行することであった。1902 年日英同盟を締結したイギリスから日本外務省へロシアの西域浸透状況の調査依頼あり、根津院長から、これを受けた二期生、林出賢二郎、波多野養作ら五人は、1905 年から2年間にわたるシルクロード調査を行ない、西域調査報告書を提出した。苦難に満ちた 5 人の大冒険旅行の成果を評価した外務省から報奨金 3 万円が授与され、書院ではその後毎年 1 万円を使い学生による自主的大調査旅行を実施することになり、1907 年 5 期生から第 1 回調査旅行が始まった。この大旅行は、7 月出発、10 月までに帰院するという大枠の中で、数名単位の班が編成され、テーマ、目的地、コースが学生たちによって決められた。これら研究テーマは卒論になり、観察見聞記は会報、単行本として刊行された。かくして半世紀近い、中国から東南アジアに及ぶ「大旅行」が幕をあげた。書院生は「陸行」がほとんどで、時に船を利用し、馬小屋に泊まり、食事は農民のもの、県知事に挨拶する必要があったが、その多くは日本留学生であった。書院生は薬を持っていたので、仁丹を求める行列が宿の前にはできた。また、匪賊や馬賊に出くわすこともあったということで、肌で中国事情を知った。学生の総参加数は 4500 人、総コースは 700、調査地域は中国本土、満州、ウラジオストック、東南アジアに及ぶ広大な面積で、二十世紀前半の長期にわたる旅行はまさに世界最大のものであった。調査対象は当初の商業、経済から教育、文化、人口、交通等、今日という地域研究への領域であった。指導教授は書院卒の経済地理学担当の馬場鉄太郎であり、書院はアメリカより数十年も早くから地域研究、文化人類学の学問領域にあった。

この「大旅行」は 4 つの時期に区分できる。第一期は「拡大期」、日本人の知らない地域へコースを設置し、調査地域の拡大に努めた時期。第二期は 1920 年の「円熟期」で満州事変(31 年)までの十年余り。1917 年の徐家匯校舎、18 年の支那研究部、四年制移行、中華学生部設

置など、それまでのビジネススクールに研究色が加わった時期で、大陸の隅々まで踏査した。第三期は「制約期」で満州事変の翌 32 年から大學昇格の 39 年頃まで。この時期の調査は満州が多いが、盧溝橋事件で旅行を中断し、大内暢三院長から通訳従軍を説得された。徐家匯校舎の放火で 30 万枚余りの「大旅行」原稿その他は焼失し、翌年から上海交通大学を借用することになる。第四期は「消滅期」。大学に昇格、私的大旅行、43 年専門部設置。5 期生以来の伝統的「大旅行」は戦争でうち砕かれた。書院の「大調査」では足で集めた調査報告書(卒論)と各班の日誌が夫々提出され、「支那省別全誌」十八巻(16~20 年)につづき「新修支那省別全誌」(二十二巻、戦争のため九巻目で中断)が発行された。書院生が歩き廻った二十世紀前半の中国は革命と戦争に明け暮れたが、例えば 1930 年前後の四川省では車道、市街地再開発の工事等は、いずれも各軍閥の手でなされ、そのトップはいずれも日本への留学経験があり、日本の近代化をモデルにしていた。

牧野伸顕は、22 年東亜同文会が財団法人化された時に会長になり、近衛文麿が副会長に、日清貿易卒の白岩竜平が理事長になり、調査、研究、出版、教育事業に重点が置かれ、同文書院は常にリベラルな学風を保つことができた 1918 年中華学生部、21 年天津同文書院、22 年漢口同文書院が開設され中国人に対する窓口を広げた。中華学生部は、定員 50 人で、一年目は日英語中心で、あと三年間は日本人と共学コース。しかし開設の間に排日運動が始まり、21 年に上海で共産党が結成され、中華学生部の学生の思想や行動は書院生にも浸透し、西里、安斉、中西らが反戦運動をするようになり、34 年には中華学生部は廃止された。しかし同部の中国人学生たちはいずれも「同文書院は良い大学だった」と讃えていた。

1937 年虹橋路校舎が放火され、翌年上海交通大学を借用したが、当時の東亜同文会会長は近衛文麿で、38 年大学設立を申請し、39 年

「大学令」による「東亜同文書院大学」が誕生し、学長に大内院長が、つづいて矢田七太郎が、更に本間喜一が着任した。戦局が厳しくなる中、45年8月の終戦を迎えることになった。

### 〈キラ星の如く〉

合せて50年間で5000人の卒業生を出した書院はどのような道を歩んだのであろうか。「東亜同文書院大学史」や当時の名簿には、各分野で活躍した卒業生はキラ星の如く、その豊富な人材、能力に驚愕するばかりである。日清貿易研究所出身の白岩は、日清戦争後の日清通商航海条約があり、揚子江の支流が開放される機運が高まったのに伴い、湖南省への航路を開発すべく、26才で上海に大東新利洋行を設立、1907年には日清汽船会社へ統合し、長沙への航路も開発している。20年に東亜同文会幹事、24年には理事長として活躍した。

第一次大戦後、日本の商社、海運、紡績、精油、鉱山などの資本が中国に進出、書院卒業生はビジネススクールで商業実習や大調査旅行で体験した経験、知識、自信等に基づき中国工業の近代化に大きく貢献した。商社系で最も早く中国に進出した三井物産に70人ほど、大倉組には28人、三菱商事には50人以上、日商岩井へは40人、古河鉱業へは57人など、その他、住商やトーマン、伊藤忠商事、日綿実業、丸紅、兼松江商なども。海運業も日清汽船、東亜海運、大連汽船、日本郵船、山下汽船など。紡績業では大日本紡績、鐘紡、富士紡績、同興紡績など。金融業では横浜正金や台湾、朝鮮のほか、日本、住友、三井三菱、満州中央の各行。21期生の坂口幸雄氏は大連の日清製油社長。丸紅社長となった36期の春名和雄氏。44期生小田啓二氏は兼松社長となった。ジャーナリズムの世界では多士済々。中日新聞論説委員で44期の伊藤喜久蔵氏は、文革時代に壁新聞によって国際報道に貢献したとしてボーン国際記者賞を受けた。

外交官としては、5期生の石射猪太郎は1915年の外交官試験に合格すると次々と後輩が続

き、世界の大使館や領事館で活躍した。彼の日記「外交官の一生」には上海総領事や外務省東亜局長時代に、政治介入してくる軍部の国際感覚の欠如や独断専行が日中関係を悪化させていくと憂慮している。更に中山優は朝日新聞に入社するが病気になり、外務省嘱託となり、37年近衛文麿の原稿にたづさわ、近衛の側近と知り合い、38年建国大学の教授になる。教育・研究者として山田良政、純三郎がいる。良政は孫文が指導した惠州蜂起で戦死、弟純三郎は辛亥革命で帰国した孫文を迎え、その秘書として日本の財界から革命資金の援助を受けるなど革命に大いに努力し、孫文の「大アジア主義」神戸講演のあと、北京で病死するまで側近としてつくした。

### 〈愛知大学誕生へ〉

終戦の年と翌年、46期生は上海へ渡航できず、富山市の呉羽紡績(当時は航空会社)の一角を借り、書院の呉羽分校として利用、開校は7月25日。(分校長・斉伯守)8月2日大空襲。分校長らは外務大臣へ分校存続を嘆願した。その年10月15日に再度開校式。この一時的再生が新たな展開を可能にした。

本間は44年学長に就任、猛烈なインフレの上海で閉学処理の大事業を行ない、21年3月帰国時は書院の学籍簿と成績簿を持ち帰った。しかし、東亜同文会は解散し、本間は自力再建に動き始めた。その中、豊橋市の旧陸軍予備士官学校を借用する話が決まり、横田市長は全面協力を伝えた。しかし連合国軍総司令部(GHQ)から書院はスパイ学校とみられていたため、同文書院の名は使えず、「愛知大学」という名を使った。また、GHQが東亜同文会の建物を接收することを知った呉羽分校の神谷教授らが東京に急ぎ、接收前に中国関係図書や大旅行調査報告書など約4万点を運び出して保管。これが大学開設時の蔵書となった。

愛大の教員は分校教員に加え小岩井、鈴木教授らと京城台北帝大の教員も就任した。終戦翌年の11月15日愛大(旧制)の設立が認可さ

れ、翌年 1 月から学生が入学した。書院から旧制学部には 138 人、旧制予科に 166 人が入学。その他 80 校余りの中国、台湾の大学、高専から入学し、文字通り全アジア大学の様相を呈した。本間は初代学長に慶応義塾塾長であった林毅陸を招いた。

愛大の設置趣旨書には「国際人の養成」と「地域社会への貢献」を掲げた。戦後の 53 年郭沫若中国科学院長に書院教員による華日辞典編集のカード 14 万枚の返還を願い、翌年可能となり、鈴木教授を中心に中日大辞典編纂所が設けられ、68 年に第一版、その後第二版、昨年第三版が完成した。

### 〈未来への飛躍〉

愛大は、今年創立 65 周年で書院創立から 110 年、日清貿易研究所開設から 120 年になる。愛大は 46 年中部地方で初の法文系大学となり、49 年の新制大学の移行時に文学部が新設され、法経学部は書院の伝統をふまえ、中国の法政、経済、経営の各コースが設けられ、多面的な中国研究がすすみ、国際問題研究所もその中核となり、日本初の中国研究科を創設する構想が生まれ、博士課程が認可された。一国を対象とした研究科は前例がないという文部省の態度に「中国学」の確立と存在を主張し、97 年「現代中国学部」が新設され、現地で中国語教育が、南開大学で行なわれ、現地調査プログラムも実践されている。また文科省の 21 世紀 COE プログラムに採択された国際中国学研究センター (I CCS) が発足した。

愛大は 51 年豊橋と車道に短大と夜間部を開設し、多くの卒業生を地方行政機関や法曹界、民間企業に送り出し、のち昼間部も開校し、88 年三好町に法、経営、現代中国の各学部が置かれた。本部のある豊橋には経済と文学の 2 学部と短大、国際コミュニケーションの 3 学部体制を敷いた。そして 2012 年 4 月 JR 名古屋駅に南接する「ささしまライブ 24 地区」に法、経済、経営、現代中国、国際コミュニケーションの 5 学部を結集した新名古屋キャンパスがオープンする

ことになっている。

以上の通り、書院が日清貿易研究所から始まり愛知大学に至る経緯を詳細に述べられていますが、この 60 回に及ぶ述懐によって、20 世紀前半の革命と戦争の時代に中国において書院が如何に生きてきたか、また生きようとしたのか、が如実に分り、また盧溝橋事件以降、日本がとった軍事的圧力が如何なる結末を及ぼしたかも反省させられ、まさに書院一代記として、興味津々と我々に訴えるところがあり、書院記念賞の対象になるものと信じます。

【平成 24 年 1 月 24 日】

## <受賞挨拶>

### 功労賞受賞挨拶

愛知大学名誉教授 藤田佳久

皆様あらためてごあいさつさせていただきます。本日はこういうかたちで受賞させて頂いて大変光栄に思っております。先ほどご紹介頂きましたように私は第3回目の授賞式のときにこの席に上ったことがあります。そういう点では大変恐縮していることが本音でございます。そういう中で特に昨年の新聞の連載への評価がやはり大きかったのかなと思いますけども、あらためてこういう場に上らせて頂きまして多くの方々に厚くお礼を申し上げたいと思います。特に今日は中日新聞で掲載中ずっとお世話になった小島さんにもご出席頂き、言葉を頂きましてありがとうございます。

私は元々地理学をやった人間でありますので、フィールドワークには非常に関心がありました。初めて、この近くの別の場所にありました霞山ビルの滬友会にお邪魔したのは、今から何年前でしょうか、書院の旅行記を読み始めてしばらく経ってから、本学の既に退職されましたけども、山下さんという、当時入試課長をやっておられた方で、こういうことは言っていないのか、入試問題どこで印刷してるのかちょっと言えませんか（笑）。実は入試ではいつも地理学の地図を出しているものですから、ほとんど毎年山下さんに引っ張り出されて東京へ来ていました。で、すぐ近くに滬友会の事務所があるから藤田さん一緒にどうですかって言われ、私は旅行記読んでるからぜひお邪魔したいということで、お邪魔し、そこで書院の方々と初めて正式にお会いしたんです。あの時私は旅行記を中心に始めたということが皆さん方に非常にご関心を持って頂いて、当時大串さんとか賀来さんとか庄子さんとか非常に心温かく迎えて頂きました。ただ当時の雰囲気としては、新聞にもちょっと書



きましたけれど、まだ一部にイデオロギー的な偏見の風潮があったんですね。ベルリンの壁の崩壊の前でしたから。そういうわけで書院の方々は皆さんイデオロギー的な方々には反発してございましてね、我々の大学の中でもそういう先生は相手にされてこなかったということを知りましてね。そういった点では私は地理学のちょっとアナキーな分野のところでございまして、その点ではうまく歓迎して頂いたんじゃないかなというふうに思います。そしたら大串さんがですね、突然美濃紙に書かれた文書を持ってこられて、「藤田さん、これ読んで下さい」というんですね、もういきなり手書き筆による文書を見せられまして何だろうと。最初私はまだ足を踏み入れたばかりでしたからね、予想もしなかったような奥深い世界に入っていくことは当時まだ分かりませんでした。非常に単純に考えてたんですけど。で、それがですね、蘭州紀要といいま

しょうか、漢口樂善堂に関係した蘭州調査記録だったんですよね。

それでその世界が開けてきて、荒尾精ってどういう人なんだろうという関心がいつぱいに出てまいりました。それでずっとその後研究を進めているうちに、彼はですね、日本を出ている人名辞書ではみんな大陸浪人と書いてあるんですね。しかし大陸浪人といっても色々な概念がありますけれども、彼がやったことは明らかに漢口の樂善堂での調査以来その目的が大きく変化してきます。中国自体のとらえ方にさらに関心を深めて研究色も入ってくるんですね。で、それを受けた根津さんは軍人で、例の陸軍大学校であるドイツ人の将校と喧嘩するくらい勢いのよかった方が、荒尾の資料整理と編纂をやったのです。まあ師と仰いだ非常に優れた方だった荒尾さんの意向を受けて清国の膨大な資料を半年かけ、部屋の中で動かずにずっと勉強やったんですね。ねずみが最初はちよろちよろって目の前にやってきて首を傾げて、そのうちに慣れて膝の上に乗っかってついには背中にも乗っかるっていうふうな、ものすごい集中力で勉強をして中国全体の地理学とその中でもとくに商業地理という、清国の実態を本に著したのです。ここで根津さんも大きく変わったと思うんですよ。清国、さらに中国に対して色々関心を払うようになり、きちんと把握していこうという態度ですね。だからこれが書院の基本的な精神になっていったといってもいいと思います。だから根津さんを大陸浪人という言い方も違うんじゃないかなとその頃からずっと思っていまして、その後その周辺も色々繋げながらですね、ずっと研究を続けてきたわけです。

それで特に新聞に書きましたけれど、1989年にベルリンの壁が崩壊した直後ぐらいに私の周辺も非常に変わってきたんですね。今日小島さんもお見えになられますけど、ジャーナリズムの方々が私が示した東亜同文書院の

大調査旅行の迫力に書院に関心を持って頂いた時期がやってきました。学内はまだまだそうではなかったですが学外の方々が書院を評価して頂けるようになってきたのです。それによって学内も少しずつ変わり始めたのではないかなと思います。その後、書院卒業生山田純三郎さんのご子息の順造さん宅を同期生の方々に連れられて訪ね、お父様が膨大な孫文の秘書時代に集った資料を目の前にし、これはぜひ本学に寄贈していただきたいと順造さんの同期生の方々にお願いし、その後本学に寄贈していただくことになりました。そこで記念センターの展示室を作り、というような発展形になりました。それがさらにのちの2006年からの大きな文化省選定プロジェクトのきっかけになったんじゃないかなと思っています。

そして去年の2月に小島さんが突然訪ねて来られて、辛亥革命100年の今年、書院のことを書きませんかっていうお話があったんですね。そのころ定年まであと少し前でまだ非常に元気だったんですね。元気だったんですけど、3月の終わりの定年の直前に学内で中部地方産業研究所っていうのがあって、そのバスツアーに私ずっとガイド役を一番前の席でやってたんですけど、大学の近くの四つ角のところで思い切り軽四自動車と正面衝突しまして、私だけ前列に飛び出してしまったんですね。あとの方は皆ぱっと座席の前の手すりに掴まったから大丈夫だったんです。私だけ掴まるところが無くてですね、頭のむち打ちをやってしまってますね、頭がかーっと熱くなって非常に痛いかなと思ひまして。それから半年医者通いしたんですけども。今日のような天気が好くなるといいんですけど、低気圧が近づくと体が変わるんですね。こういうのは初めて経験したんですけど、頭が重たくなってしまうんですよ。それから秋以降は少し軽くなりましたけども、ご依頼の新聞に執筆する直前まで頭が重たくなりまして、まづいな

あと思ったんです。執筆開始が刻々と迫ってきておりましてが、あんまり本を読むと頭が重たくなってどうしようかなという時期があったんですね。

しかし、せっかくのチャンスで、特に書院の最初、荒尾、近衛、根津さん3人をもっときちんと評価すべきだということは前から思っていましたので、この連載をよりいい機会にして最初この3人を、言うなれば3人組ですかね、もう一回きちんと再評価するというふうに書き直したわけです。書き直したというかそういうかたちでお伝えしたんです。で、書院もその路線の上で見てくたこういうふうになりますよというかたちです。私流の考え方ではあります。特にあの3人が今、中島さんが言われたように中国の上海という異国の地でしかもああいう語学教育等、異国の地の調査を徹底的にやってしまったのですね。欧米の列強も植民地支配のために調査をやりですけど、あんなに長期にわたってしかも学術的な成果を作り上げてやってたのは世界に無いですね。戦時中にアメリカはミシガン大学に日本研究所をつくって日本にいかにか戦略的に対応するかで膨大な情報を集めて対応し、戦後の地域研究っていう領域を世界に打ち出しました。文化人類学もその一例です。しかし、書院の場合はその半世紀前にもうこの地域研究をやっていたのです。結局戦争に負けたため評価されなかっただけです。だからそういう評価をあらためてきちんと出すというようなことを含めて東亜同文書院全体をいかに再評価して多くの人に知って頂くかということを伝えたかったのですね。

書院の研究をやっていると、一時期スパイ学校ですかというようなお話が結構一般の人からあったりするんですね。そのイデオロギー的な偏見が書院のイメージをカバーしています。これをできるだけ今回破って中身を出していこうということで集中執筆しました。毎日書かなくちゃいけないんで新聞作家の人は

大変だなと思ってたんですが、10月から始まって10月の下旬になると、さすがに続けるのがしんどくなって、ああこれはえらい、まだ先があるし前途洋々だし大変だなあと思ったことがありましたけども。結果的には、集中的に筋を通してさっと書くということの効果もあったと思っております。したがって12月の中旬ぐらいに小島さんと連絡しながらいよいよ最後が見えてきたときは嬉しかったですね。緊張しながら、しかし楽しんで今まで考えてきたことを書かせて頂いたところでもあります。で、先ほど小島さんから本になりますというお話もありましたので、多くの人に同文書院を知って頂けたら大変ありがたいなと思っております。

最後になりますけどもこの間ずっと書院の卒業生の方々に大変お世話になりました。一番最初は当時最も古い卒業生で6期生の方が小牧に住んでおられて、お話して下さるのを大変心待ちにされてたんですが、私の急な用事で行けなくなって、1週間後には亡くなってしまったということをお聞きしました。これはいけないということで、長崎に行きまして第9期生の齊藤さんにお会いしました。新聞の文章にも書きましたけれど大変ご苦労された方で、戦前は上海で大成功で、戦後はゴミ拾いから始めたという、大変感動のお話をうかがいました。それから、じゃあ書院の方はどういう人生を送られたのか関心を持って随分多くの方にお会いしてまいりました。ただオープン・リサーチ・センターのプロジェクトが始まるとそっちも忙しいものですから、少し間があいてしまいましたのが残念ですが、また自由になりましたので、ぜひ皆様方にもお話を伺わせて頂ければと思っております。

本当に随分の方々から順番に非常にたくさんの方にお会いしてお話を聞きまして、私もたくさんの人生を経験したような気になります。それから中国調査旅行日誌を読むと私もあっちこっち行ったような気がいたします。私も中



国に50回ほど行ってると思うんですけど、それぞれの地域を見ながらこれは旅行記にはこう書いてあったなということを思いながら巡ってきました。これも書院の最初の旅行記との出会い、皆さんとの出会いの中で、私としても色々充実した研究といいますか、そういう時間を送らせていただくことができたことは皆様方のおかげかと思っております。本日は雪の北陸から宮田一郎先生もいらして頂いて、ありがとうございます。

そういうことでこの賞は頂きましたけれど、本当に書院の方々のおかげであるということで、ごあいさつにかえさせていただきます。ありがとうございました。



## ＜推薦の辞＞

### 東亜同文書院基金奨励賞

武井義和殿

中島 寛司

武井 義和氏は、1972 年埼玉県生まれ、1995 年愛知大学文学部史学学科卒業、2006 年愛知大学大学院中国研究科博士課程修了。博士(中国研究)

2011 年 3 月まで愛知大学東亜同文書院大学記念センター ポストドクターでした。現在は、愛知大学非常勤講師を勤めております。

主な研究分野は、近代日中関係史、朝鮮近代史、東亜同文書院 等です。

これらに関する主な著作、論文は、  
「孫文を支えた日本人 山田良政・純三郎兄弟」愛知大学東亜同文書院ブックレット⑦単著 2011 年 3 月、翻訳書「中国における東亜同文書院の資料選集」上海交通大学刊 2012 年 3 月、「戦前上海における朝鮮人の国籍問題」(『中国研究月報』60 巻 1 号、2006 年)、「東亜同文書院に関する先行研究の回顧と今後の展望」(『オープン・リサーチ・センター年報』創刊号、愛知大学東亜同文書院記念センター 2007 年)、「中国における東亜同文書院研究」(『愛知大学国際問題研究所紀要』132 号 2008 年)、「東亜同文書院に派遣された公費生について―愛知県を事例として」(『オープン・リサーチ・センター年報』3 号 2009 年)など。

これらの研究・活動の中で、奨励賞として顕彰したいと思いますのは、①東亜同文書院研究、特に中国側からみた評価・見解。②孫文と山田兄弟の研究。③愛知大学東亜同文書院記念センターの 2006 年文部科学省認定のオープン・リサーチ・センター活動の中心的メンバーであったことです。具体的には、記念センターの資料整理、東亜同文書院の資料展示・講演会の企画、実施、同講演会では「孫文と山田兄弟」について要を得た分かり易

い講演は好評でした。資料展示・講演会は、横浜 東京 弘前 福岡 シカゴ 神戸 京都 山形 名古屋 富山等で開催、また昨秋には、辛亥革命 100 周年の国際シンポジウムが豊橋で開催され、孫文と山田兄弟について講演をされました。

武井氏の推薦対象は、東亜同文書院研究と孫文・山田兄弟の研究、それにこれらの研究内容を発表する機会の多いことです。

同文書院研究については、1901 年の書院建学から 1945 年までの検証ですが、最初の近衛篤磨公の志の評価、侵略戦争に加担したとされる時期のマイナス面、大旅行報告書の評価、卒業生の日中友好に貢献した評価、等々の日中の研究は今後大いに生かされるものと思います。

孫文と山田兄弟については、山田兄弟の出自から歴史の舞台で活躍する成長の過程、歴史に貢献する姿を顕彰する研究は、年齢を問わず学ぶに値すること多大です。生地弘前での展示・講演会を機に、弘前市民にも山田兄弟の再発見をもたらし、昨年末の東奥日報の「弘前と辛亥革命～孫文を支えた山田兄弟」の 6 回掲載は、多くの弘前市民に誇りと励みをもたらしています。

武井氏には、更なる書院研究、記念センター活動の発展充実に関与してほしいこと、後輩の育成にも関与して欲しいこと、等に期待しております。

これまでの功績と今後に期待して奨励賞授与を推薦する次第であります。これを以って、推薦の辞にさせていただきます。ありがとうございました。

## ＜受賞挨拶＞

### 奨励賞受賞挨拶

愛知大学非常勤講師 武井義和

武井義和でございます。このたびは、東亜同文書院奨励賞を頂きまして、心からお礼申し上げます。

ご紹介にありましたように、革命の指導者・孫文の協力者であった山田良政・純三郎兄弟の生涯を紹介した『孫文を支えた日本人』、そして霞山会と上海交通大学の共同研究の成果として上海交通大学が発行した『資料選集』を日本語に訳したことを評価頂きまして、大変嬉しく思うと共に、皆様方のご理解とご協力に心から感謝申し上げます。

この『孫文を支えた日本人』は、去年が辛亥革命 100 周年であったこともあり、現在記念センターが所蔵する山田兄弟関係資料から厳選した資料を収録して、山田兄弟の軌跡を明らかにしたものです。

もともと、この資料は戦後長らく、山田純三郎の四男で書院 38 期生でいらっしゃった順造氏のお宅に在ったのですが、亡くなる直前の 1991 年に書院同期生・阿部弘氏のご尽力により、順造氏が愛知大学へ寄贈を表明され、同年秋に寄贈頂いたという経緯がございます。また、書院 18 期生の村上徳太郎氏とご子息の武氏が埼玉県でお祭りされていた靖国神社において、順造氏がある愛知大学関係者と出会ったことも、本学へ資料が寄贈されることにつながったと聞いております。

私は愛知大学大学院修士課程に進学した直後の 1995 年夏に、先輩に誘われて資料整理という形で山田兄弟関係資料に初めて関わりました。以降、この兄弟が近代日中関係史を考える上で重要な存在であることを強く意識して参りましたが、2006 年に記念センターが文科省による 5 ヵ年の「オープン・リサーチ・センター事業」に選定されたのを機に、山

田兄弟に関する研究を本格的に行うようになりました。『孫文を支えた日本人』はその過程の中で出来上がったものですが、順造氏が生前熱心に写真を整理し調査された成果の上に、私の著作が成り立っていることを申し上げます。

しかし、山田兄弟は日記やまとまった回想録を残さなかったため、革命参加に至る詳しい動機や思想的側面がまだ十分に明らかにされていません。こうした点を今後の研究課題に据えていきたいと考えております。また、兄良政は南京同文書院教員、弟純三郎は東亜同文書院事務員兼教員であったので、根津精神に代表される同文書院の思想と山田兄弟の関係という視点からも、考察を深めていきたいと思います。

また、『資料選集』につきましては、霞山会の北川文章前理事長、星博人常任理事が中心となり、2004 年から 2006 年にかけて行われた霞山会と上海交通大学の東亜同文書院をめぐる研究交流の成果として、上海交通大学が中国で収集した東亜同文書院関係の資料の中から、特に関連深い資料を 2006 年に編集出版したものと伺っております。

このプロジェクトで日本側代表を務められた当時の藤田佳久記念センター長から『資料選集』を日本語に翻訳し、出版する話しを頂いたのは今から数年前、私が「オープン・リサーチ・センター事業」の下でポストドクターとして記念センターの業務に従事している時でした。

大変光栄なことと思い、即座に引き受けたものの、いざ翻訳に取り掛かってみますと語学力の壁が立ちました。また多くの業務に関わっていたため、順調に翻訳が進まな

い時が間々あり、時間が予定以上に掛ってしまいました。

しかし翻訳の過程で、日中戦争以前の交通大学と東亜同文書院の学生交流などの、日本国内では見るできない資料をしっかりと読むことができました。今後の書院研究を進める上で、貴重な勉強の機会を与えて頂いたと思っております。3月末日に日本語版が発行される予定ですので、これをバネに、近代日中関係史における東亜同文書院の実態解明について、さらに考察を深めていきたいと思っております。なお、翻訳において、宮田一郎先生には私が分からなかった幾つもの単語・文章の意味をご教示頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今回、東亜同文書院奨励賞という素晴らしい賞を頂くことができましたのは、ひとえにご臨席の皆様をはじめ、多くの方のご支援とご協力があったからであります。重ねて厚くお礼申し上げます。そして最後に、今後とも山田兄弟、そして東亜同文書院に関する研究をご指導・ご鞭撻賜ります様、謹んでお願い申し上げます。

本日は誠に有難うございました。

